

現場の独断

福島第一原発1号機について、原子炉を冷やすための海水注入が一時中断していたことが問題となっていました。東京電力は26日、海水の注入は現地所長の判断で中断せず、継続していたことを明らかにしました。

東京電力が去る16日に公表した資料においては、3月12日午後7時4分に開始された海水注入が同25分に停止、午後8時20分に再開されるまで55分間にわたって海水注入が中断したとされていました。

今回の新たな事態に対して、東電の武藤副社長は記者会見の中で、海水注入を継続したことは技術的には妥当としながらも「吉田所長の処分を検討している」と話しています。

福島第一原発の事故に関しては、塾頭通信の中でも幾度か取り上げてきましたが、その中で繰り返し述べてきたことは、正確な情報の提供が何よりも重要だということでした。しかし、現実には、政府や東電からの情報が、発表後にたびたび修正されるというように、情報管理の面では誠に杜撰としかいいようがありません。こうした中で、再び、これまで説明してきたことと全く反対の状況が明らかになったことは、国民と政府・東電との信頼を断ち切るようなものだと思っています。

原子炉内では、海水の注入が始まる以前に既にメルトダウンが起こっており、海水の一時中断は殆ど影響がなかったと見られているようです。確かにそうかも知れませんが、しかし、問題の所在は、そういうことではないのです。

まず、一旦始まった海水注入を、誰が、何故中断するという判断をしたのかということです。

東電では、総理官邸に連絡役として駐在していた武黒東電フェローから「首相の了解が得られていない」と東電本社や福島第一原発に連絡があり、同原発と本社を結んだテレビ会議で中断を決めたとされています。

東電がそう判断した決め手は、「最終的な責任を負う首相が了解していない状況で、注水を継続すべきではない」というものでした。

それでは、総理官邸では如何なる議論が行われていたのでしょうか。「再臨界の可能性」などについての議論があったのかも知れませんが、結局は、具体的な方針がそこでは示されなかったのだと思います。

東電側が、そうした官邸での議論の空気を忖度して海水注入を中止することにしたとすれば誠に空恐ろしいことです。なぜなら、国民の命にかかわるような事態であるにもかかわらず、誰も責任を持って決断をした人がいないということになるからです。

次に問題になるのは、吉田所長の行動でしょう。

吉田所長は、本社とのテレビ会議で海水注入の中止方針を示された際、特段異論を述べなかったといわれています。

仮に、吉田所長は、海水注入は継続すべきであると考えていたのなら、その事をハッキリと主張すべきでしょう。そうせずに、海水注入も中断しないということは官邸や本社の議論は最初から無視するつもりだったということに外なりません。例えば、本部との連絡が途絶しているような場合に、所長が責任者として判断し、行動するということはあるでしょう。しかし、初めから現場の指揮官が本部を無視して独断で行動するというのでは、もはや危機管理とはいえません。

同時に、本部の判断や指示・命令に問題があり、このために現場指揮官が独断で判断、行動したとすれば、本部の責任もまた厳しく問われなければなりません。現場の指揮官の独断だけを問題にして、処分すればよいということにはならないと思います。

危機管理で重要なことは、判断すべき人が責任を持って判断し、命令すべき人が責任を持って命令するということです。福島第一原発の事故対応では、この至極当たり前のことが見えてきません。このことが、一番の問題ではないでしょうか。（塾頭 吉田 洋一）